

文化的景観をきつかけとした

風景づくり・地域づくり——採掘産業の場合

岡村 祐(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻)

採掘産業に関連する文化的景観の保護は、風景づくり、ひいては地域づくりという広い視野をもって取り組む必要がある。なぜか。それは採掘という産業の特異性から考えることができる。

第一に、生産物(資源)は、生産活動によって確実に減少し、採掘し尽くせば、生業を停止せざるを得ない。つまり、採掘という地域の基幹産業が斜陽にある地域において、いかにして地域全体の活力を保つのか、考究していかなければならない。

第二に、文化的景観としての評価は、採掘の場だけでなく、その鉱物資源の加工や流通に関わる施設(跡)等、また産業を支える人々の生活の場が含まれる。すなわち、採掘に関連する部分に重きを置きながらも、その周辺で醸成されてきた地域の文化にも配慮しなければならぬ。

それでは、文化的景観をきつかけとした風景づくり・地域づくりをいかに

展開していけばよいか、宇都宮市大谷地域を例に考えてみたい。

●新たな産業としての観光

採石場跡は、名勝や史跡の観点から、あるいは文化的景観としても、土地利用の堅持や遺構等に対する適切な保存措置が講じられる。それに加えて、切り立つ岩盤の壮観な眺め、採掘関連遺構等の積極的な活用が望まれる。

すなわち、大谷地域における新たな産業として、観光を取り入れていくということである。そこで留意すべきは、いかに地域の主体性を維持していくのかということと採掘産業や地域そのものを学ぶ「知的観光地」を志向することであろう。

●景観素材としての大谷石の利用

大谷石の場合、建築・土木構造物の材料として広く地域に普及し、集落景観の基調となってきた。大谷地域では現在でも、新築家屋の一部やストリー

トファーニチャー等に用いている例が多数見られる。

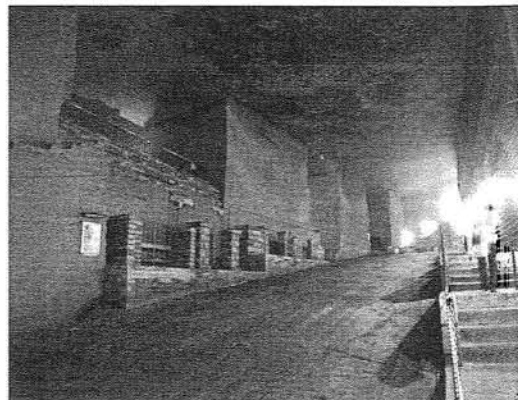
特色ある風景づくりを進めるために、大谷石の利用をルール化した景観計画・協定等を定めていくことを検討すべきである。その結果、採掘の歴史・文化に対する地域住民の理解、大谷石需要減少の歯止め等の効果も期待される。

●社会や産業のシステムの継承

文化的景観としては、採石の場である山とその麓に広がる集落地の面的なまとまり、軌道跡や駅跡を中心としたかつての輸送に関連する緑的なつながりが評価される。しかし、これらは現代社会においては形骸化しているか、あるいは、少なくとも視覚的にそれを理解するのは難しい。

これらの関係性を再生させていくことも地域の歴史・文化の理解という観点において欠かせない。その際、観光、教育、コミュニティ形成等の視点を取り入れ、いかに現代的意味を持たせるかということと同時に考えなければならぬ。

壮大な地下採石場跡を見学することができる大谷資料館



現在は一般道路となっているが、かつては大谷石輸送のための軌道が敷設されていた

